

中田かわら版 5 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

■この人に会いたい<70>

「ウエルネスいずみ」会長20年

平木 恒雄さん (87) 中村自治会



「ウエルネスいずみ」の設立の経緯について、平木さんは鮮明に覚えている。平成 13 年 (2001 年) 10 月 1 日、神奈川県議会で小山和弘県議が一般質問で、県知事の津田さんに「今後増加するであろうシニアの居場所づくりを地域につくりたい、知事はどう思うか」。議会を傍聴した平木さんら数人は熱弁を聞き入っていた。後日、小山氏を中心に草案を練った。会の名称は小山さんの提案で「ウエルネスいずみ」*と決まった。

*「ウエルネス」(Wellness) ; 運動、休養、栄養の 3 つをバランスよくとり健康な心身づくりが目的で 1960 年代初め米国で始まった運動。

設立総会は翌 14 年 3 月 5 日、横浜南農協会議室で行われた。活動方針も「心身ともに健康で介護保険の世話にならず、楽しい有意義な人生を過ごせる居場所づくりを目指す」。会長に平木さん、顧問に日本 I P R (対人関係) 研究会代表・元 NHK 放送博物館館長の北林才知さんが選ばれた。活動は講演会とハイキング (バス旅行も) の 2 つが主流だった。講演会のテーマも健康、医療、老後の生き方、介護保険の利用、老人ホームの見学など。平成 30 年 3 月まで 15 年間に年 2 回 (合計 28 回、参加者延べ 1421 人。平均 53 人)。その合間にプロのバイオリニストの演奏会、地元音楽バンドを聴く会、精進料理の試食会など多彩な行事を行ってきた。

一方、日帰りハイキングは関東近辺の山々、箱根、奥多摩、三浦半島などの観光地巡りなど。ハイキングは大抵温泉入浴付きだった。バスハイクは車内でゲームや歌があり、抽選による豪華景品付きが魅力だった。15 年間、27 回の開催で 1 度も事故がなかったのが自慢と言えれば自慢だった。必ず事前の下見を、会長以下スタッフ 4~5 人で徹底して行っていたこともある。「ウエルネス」が通常の活動とは別に泉区社協への貢献度も紹介したい。同社協にはおよそ 85 団体が登録されそれぞれの会の目的をもって活動している。同時に社協主催の赤い羽根の街頭募金、ボランティア・フォーラム、福祉大会、泉区民まつりなど協力事業がある。それには積極的に人員を派出、この面で社協から大変感謝され信頼されるグループだった。一重に平木会長の判断一つで決まるだけにスタッフとの信頼関係があるからこそできたこと。



出演者と記念撮影
右が平木会長

平木さんは広島県呉市の生まれ。広島原爆は疎開していたので助かった。大学では機械工学を専攻。卒業後バルブメーカーに就職。入社後の 10 年間は技術部門に。以後営業部門に配属し平成 14 年 (2002 年) まで 45 年間勤め退職。趣味は旅行と登山。でも、最大の趣味はクルーズで世界を観光すること。『文芸春秋』(500 ページもある分厚い月刊誌) を 30 年間愛読。年 2 回掲載される芥川賞、直木賞作品を楽しく読むというから脱帽だ。

「ウエルネス」も高齢化が進み事業内容も変わってきた。平成 22 年に DVD による落語を鑑賞する会を立ち上げ令和 4 年まで 15 回実施。平成 30 年から主行事が踊場ケアプラザでの「踊場寄席」、古典落語、真打の鑑賞会、にぎ

わい座での「ふれあい寄席」などが中心になった。平木さんが 20 年間の感慨を語ってくれた。「このように長いこと続けられたのも踊場ケアプラザのご厚意、素晴らしい仲間たちの協力と妻の祺至世 (きしよ) のバックアップも大きな力になりました」。いい言葉である。 (宮田貞夫)

～一人ひとりが CO2 を減らす努力をし、美しい地球を子どもたちに残そう！～

■シリーズ「地球温暖化問題」＜3＞

地球を温室効果ガスから守ろう

「私たちができること」(下) 森下 正勝 (泉区領家)

前回はこの地球が宇宙の中で極めてまれな存在で、かつ、掛け替えのない美しい世界であることを知りました。しかし、その地球がいま温暖化による気候異変を含め危機的状況に瀕しているのです。「事態はより速いスピードで悪化している」とUNEP(国連環境計画)は報告しています。

■人間のエゴが環境を減ぼす

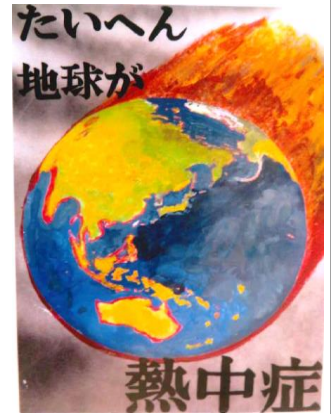
人口の増加により、今までは植物が炭素を吸収し、酸素を出して地球上の空気を浄化してくれた。ところが人間のエゴがアフリカの密林や南米のアマゾンなど貴重な森林資源を伐採し、住民の生活を脅かし地球温暖化の原因にもなっている。異常気象は豪雨、台風、熱波による山火事、砂漠化を発生させている。

■温室効果ガスについて

地球の誕生は46億年前といわれている。ここ数千万年の歴史は10万年単位で温暖化と寒冷化を繰り返し今日に至っている。地球物理からいうと現代(平成、令和)は地球の寒冷期に入ろうという時期なのに、平均温度は確実に上がり続けている。大気中の「温室効果ガス」がわれわれ人間により大量に排出されており、これらが地球の温度を押し上げている。

■地球の温度を守ろう

地球の温度を守るヒントが実は日本の建物にある。地球の温帯地域(北緯30度～45度)に存在する日本の建物がそれである。平均温度5℃～25℃にある日本の古くから伝わる天井、障子、畳、床下は熱さ、寒さを防ぎクーラーを使わないことによって温暖化効果ガスを削減してきた。そうした機能を持った日本の建造物が1000年、2000年も続いてきた。お寺の建物がいい例である＝写真。日本の古来の建造物は先人たちの知恵と努力によって遮熱、遮冷を備えた素晴らしい建物なのである。我々一人一人の力は小さいが、大きなうねりになって地球温暖化削減に貢献できればと思う。



「美しい地球を守ろうプロジェクト」
参加作品 (優秀賞の竹内麻衣子さん)



障子、畳、床下は熱さ、寒さを防ぎクーラーを使わないことによって温暖化効果ガスを削減してきた。そうした機能を持った日本の建造物が1000年、2000年も続いてきた。お寺の建物がいい例である＝写真。日本の古来の建造物は先人たちの知恵と努力によって遮熱、遮冷を備えた素晴らしい建物なのである。我々一人一人の力は小さいが、大きなうねりになって地球温暖化削減に貢献できればと思う。

(構成・宮田貞夫)

編集後記

専門家によれば、長引くコロナ禍で日常的に着用しているマスクで3人に1人が体調不良を感じている。その対策は「マスクを外す時間をつくる」こと。

飛沫感染を防ぐため必要なマスクだが、人のいない場所、ソーシャルディスタンスの保てる場合は外してもいいとされている。これから気温上昇とともに熱中症のリスクも高まると予想される。工夫対策し上手に乗り切りたい。

T.k

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本 正

編集委員；山木重樹、木下良江、小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、佐々木弘美、嶋 宏之